「復活すべき方の<死>」

マルコによる福音書１５章４２－４７節

森島　牧人　牧師

今日の聖書は、「既に夕方になった。その日は準備の日、すなわち安息日の前日であったので、アリマタヤ出身で身分の高い議員ヨセフが来て、勇気を出してピラトのところへ行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出た。この人も神の国を待ち望んでいたのである。ピラトは・・・百人隊長に（イエスの死を）確かめたうえ、遺体をヨセフに下げ渡した。ヨセフは亜麻布を買い、イエスを十字架から降ろしてその布で巻き、岩を掘って作った墓の中に納め、・・・」（マルコ１５：４２－４６）と始まっていて、十字架から降ろされた主の遺体がアリマタヤのヨセフという人の墓に埋葬されたという事実を簡明に伝えています。ここで重要なことは、＜人は死ぬ。そして主イエスは死んだ。ゆえに主イエスは人である。＞という三段論法が鮮やかに成立していることで、マルコがそれを示している今日の数節、すなわち主イエスの死とその後の復活という二つの出来事に挟まれている短い記述には、大切な意味があるということです。

当時のエルサレムの墓地は街を囲む壁の外側の、壁からは２５ｍ以上離れたところにありました。死者は忌み嫌われましたが、それでも一人の人が死ねば、それを悼む葬列が続きました。しかし主イエスの葬儀は全く違っていました。申命記２１：２２・２３には「ある人が死刑に当たる罪を犯して処刑され、あなたがその人を木にかけるならば、死体を木にかけたまま夜を過ごすことなく、必ずその日のうちに埋めねばならない。木にかけられた死体は、神に呪われたものだからである。」と記されています。使徒パウロはこの言葉を思い起こして「キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました。」（ガラテヤ３：１３）と言っています。

しかし、主の十字架の死は呪われた死であり、捨てられた死であったのです。しかも人に捨てられる以上に神に捨てられる死という真に厳しいものでした。しかし、この死こそが罪人の死の実相であることを、私たちは知らねばなりません。十字架上の「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」（マルコ１５：３４）との主イエスの死の内容そのものであった叫びに表されたように、・・・まさに、主イエスは私たちに代わってまさに＜罪人の死＞を遂げられたのです。

主イエスが息を引き取られたのは、安息日の＜準備の日＞である金曜日の午後三時頃でした。ユダヤ教では夕方六時頃から新しい次の日が始まることになっていましたので、申命記にあったように午後三時に死なれた主イエスの遺体は、夕方六時の安息日の始まる前に葬らねばなりませんでした。そのような緊迫した中で、主の埋葬を引き受けたのがアリマタヤのヨセフだったのです。

出身地とされるアリマタヤのことはよく分からないのですが、彼は最高法院のメンバーという高い身分の裕福な人でしたが、何よりも大事なことは、彼が「神の国を待ち望んでいた人」であることでした。ユダヤ人のトップにいる人がなぜ主イエスの遺体を葬ったのか、ここにはその動機などは書かれていませんが、これを書き記した記者は、ヨセフが「神の支配を受け入れ、その実現を待ち望んだ人であった」と明らかにすることで、彼のこの行為への説明は十分であると考えたと思われます。

最高法院の一員としてのヨセフが、それまで主イエスに対してどのような立場でいたのかなど全く分からないのですが、主イエスの処刑に立ち会い、主の死を直視しながら「本当に、この人は神の子だった。」と言った百人隊長と同じように、このヨセフもまた、主イエスの死を直視して初めて、主がメシアであることを理解し、その埋葬を決意したのではなかったかと思われます。いずれにしても明らかなことは、主イエスの地上に於ける最後の業を完成させるために、神御自身がここでヨセフを用いて埋葬の仕事をさせられたということです。

主に代わって十字架を担いだキレネ人・シモンのことを思いますが、本来なら主イエスと対立すべきユダヤの議員ヨセフもまた思いもかけずに、ピラトに主の遺体の引き取りを身を賭して願い出ることとなり、許されて自分の墓に葬ったということだったのでしょう。

ユダヤ人から異邦人と言われた百人隊長の言った「本当に、この人は神の子だった」という言葉は、福音書の頂点に位置するものですが、この後ヨセフの行ったこの心をこめた主イエスの埋葬にも、その頂点にある言葉を行動によって証ししたものだったと言い得るに違いありません。私たちは、主イエスの死と葬儀と埋葬の中に、このような神の業がなされたのだったことを憶えて、歩んで行きたいと思います。

（説教要約　羽入田悦子）